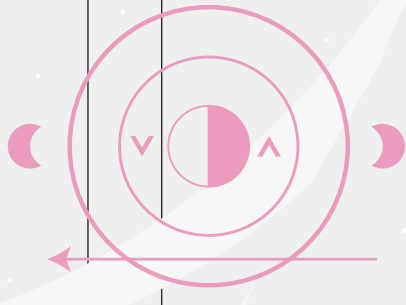


Oniki You

オニキヨウ



de

居

で

いり

居

Iri

ぐち

居

guchi

There and

Back? Again

紫陽花の下であまやどりをしていたら、  
あなたがなくなっていました。

ぽたぽた雨が線が変わって、大気が白色にそまる。

さがしにいこうか迷いましたが、いまだたらずんだままです。

どこかしこ美しく、せつなに感じたことさえ忘れてしまうのです。

あなたのことも。わたしのことも。

一呼吸ぶんの生命さえも。

足もとからたちのぼるにおいが息づいています。

土と植物のにおい。雨と陽のにおい。

とてもいいにおいです。

あなたがいなくなったのはなぜでしょう。

誰かをさがすためでしょうか。

誰かがさがすためでしょうか。

迷宮のように複雑な、あなたの心です。

わたしはここにいます。

光と雨を浴びながら。

美しい夢を見ている。

目次

ゆきて	〇
迷宮入り	〇
タナカカナタの偏愛	〇
お蔵出し	〇
かえりし?	〇

ゆきし

渋谷駅でミナミと待ち合わせ。  
人混みのざわめきをイヤホンで消す。

携帯電話をいじっているうちに音楽が消えた。

無音の中からトランクをゴロゴロ引く音が生まれた。

イヤホンを外して、アプリを閉じる。

顔を上げるとミナミがいる。

気まずげに笑って、遅れてごめんと詫びてくる。

別に良いよ、少ししか待ってないし。私は答える。

携帯電話をポケットにしまう。人混みはざわめかない。

「電車が止まっちゃってさあ」

隣を歩きながら、ミナミが言う。

「どこかの駅で、人身事故だって」

「うわー、月曜の朝から迷惑だね」

本当だよ、とミナミも憤慨する。

それから少し考えて、今日は月曜日だっけ？ と首をひねる。

月曜日だよ。社会人は普通に働いているよ。

相変わらずのミナミに苦笑を禁じ得ない。

私たち大学生は冬休みの真っ最中で、曜日の感覚が狂っている。明日も休みで、明日も休み。毎日が日曜日みたいなものだ。

ただ、時間の感覚はしっかり持っておかないと。休みボケになるよ。

しつかり者の私はミナミにちよつとした説教をする。

えへへ、と笑ってごまかすミナミ。これもいつものことだ。

でもさあ、と空を見上げてミナミは言う。

「今日は本当に月曜日かな？」

「月曜日だよ」

「絶対にそうだと言い切れる？」

えっ？ 私は友達の色を見る。

ミナミはにこにこしながら同じ質問を繰り返す。

今日は月曜日かな？

そう言われると自信がない。今日は月曜日のはずだけど……思わず、曜日を確認したくなる。携帯電話を取り出すほどでもないから、辺りを見回して日付や曜日のついているものを探す。

しかし、なかなか見つからない。駅前の巨大なディスプレイは背後に通り過ぎた。

私は昨日の夕飯を思い出す。夕飯を食べながら見たテレビ番組のことを。

あの番組は日曜日に放送される。

だから、今日は月曜日だ。間違いない。

月曜日だよ、と断言する前に、ふわつとしたミナミの興味は別のことに移っている。

「実家帰ったら、何しようかなあ」

「実家にはどのくらいいるの？」

「分かんない」

「ミナミはつぶやく。」

「すぐ帰ってくるかもしれない。ずっと帰ってこないかもしれない」  
自由だなあ、と私は笑う。

私は実家から大学に通っているの、里帰りの感覚が分からない。  
ただ、上京組の友達の誰もが帰りのチケットを取って出発した。

「ミナミ、バイトしてたよね？ シフトはどうするの？」

人ごとと知りつつ、余計な心配をしよう。

大丈夫だよ、とミナミは笑う。

みんなにお願いしておいたから。うまくやってくれると思うよ。

良いバイト先だね、と私は相槌を打つ。

バイト先じゃないよ。みんなだよ。

ミナミは笑う。

あなただってそうだよ。

トランクのホイールがアスファルトを滑る。横断歩道を渡ってセンター街へ。

平日も休日も大賑わいの渋谷に珍しく人がいない。

へえ、こんなことってあるんだ。ゴミだらけの無人道路を見て私は感心する。

誰もいない街・渋谷。写真に残しておこう。ポケットの携帯電話をまさぐる。

「すぐ助かったよ。わたし、感謝してるんだ」

ミナミが言った。

目を細めて私を見る。

「あなたが理解のある人で良かった。留学先で日本語を通じる人に出会えたみたい。力を貸してくれたありがとう」

「そんな、大袈裟だよ」と言いつつ、私は照れる。

褒められたことより友達から改まってお礼を言われるこの状況が照れくさい。

「ファンタジーやオカルトが好きなのはたくさんいるよ。今だって異世界転生モノの小説やアニメが流行してるじゃない。妖怪が出てくるバトル漫画もあるし」

「ファンタジーもオカルトもよく分かんない」とミナミ。

ミナミは架空の世界に興味がない。研究対象とっていいほど熱中しているのはこちらの世界の反転だ。飲み会で酔っ払ってうっかり口を滑らせ、たまたまそういうものに興味があった私が根掘り葉掘り問いただして事情を知った。

そして、私たちは秘密を共有し合う仲になった。

「ハリー・ポッターは知ってるよね？」

「もちろん。あっちでもすごく流行ったよ」

「映画見た？」

「途中までは見たよな……」

うーん、とミナミは頭を掻いて内容を思い出そうとする。

「ハリーがホグワーツに行くところ良いよね。なんとかの何番線のホームの……」

「9と4分の3番線ホーム？」

そう！ それ！ ミナミは笑う。あのシーン大好き。いつ見てもドキドキするよね！

私たちは数少ない共通点を見つけて少し盛り上がる。

しかし長くは続かない。

誰もいない道の真ん中、ミナミは立ち止まる。

コートのポケットから携帯電話を取り出し、宙にかざして振り回す。

何かを探すため、背伸びをしたり、かがんだり、無人道路を忙しく行き来する。

その背に向かってわたしは尋ねる。

「ミナミも魔法が使えるの？」

「使えないよ。マグルだよ」

「何してるの？」

「Wi-Fi スポットを探してる」

「Wi-Fi スポット？」

「そう」

この辺りにあるはずなだけど……つぶやく声が不安げだ。

おかしいな、誰かが移動したのかな。独りごちながら画面に釘付けになるミナミ。

こればかりは手伝えない。

私はその場に立ち尽くし、本日の曜日を考える。

考える間もなく、携帯電話を見た方が手っ取り早いとポケットをまさぐる。

何かとぶつかっただろうか、タップしてもディスプレイは黒いまま。電源が切れてしまったらしい。

この機種は再起動まで時間がかかる。

こういうとき、うずうずする。

ドキドキではなくうずうずだ。

苛立つほどではないが、平常心でいられない。

こんなとき、魔法が使えたらいいのと思う。

携帯やパソコンの起動を早くする魔法を。

Wi-Fi がすぐに繋がる魔法を。

しかし、私たちは魔法を使えない。

ミナミは実家に帰る。魔法の国には帰らない。

「繋がった」とミナミは言った。

ゴミだらけの路地にヒビが入り、穴が空いた。

こういう穴、お笑い番組でたまに見かける。

張りぼての壁へ芸人が突っ込んでいったあとにできる、紙の裂け目。ただし中は真っ黒で、反対側が見えない。私は「ハリー・ポッター」ではなく「銀河鉄道の夜」を思い出す。

宇宙の果てにある、石炭袋の穴。

一筋の光も差さない、終着駅。

「本当に助かったよ」とミナミは言った。

「全部、あなたのおかげだよ」

あなたのおかげ？ 助かったって、何が？ 私は考える。

私たちは友達になったばかりだ。お互いをよく知らない。

こちら側の世界について懇切丁寧に説明をしたり、ミナミのピンチ（なんてないだろうけど）を助けたこともない。

そもそもミナミのいるあちら側も大して変わらない。

ただ反転しているだけで、社会の秩序や文明の進歩は同じ。

日本語を喋れば、駅前にハチ公像もある。

「ねえ、このあと暇？」ミナミが尋ねる。

「暇だったら、遊ばない？」

「実家に帰るんじゃないの？」

「帰るよ。だからさ、わたしの実家に寄っていかない？」

「えっ、渋谷区に住んでるの？」

「そうだよ。なにげにわたしは都会人なんだよ」

ミナミは得意げに胸を張る。

すごいなあ、生まれたときから渋谷に住んでいるなんて。オールし放題じゃん。

東の間、私は憧れる。そして、すぐさま我に帰る。

いやいや、ミナミの帰省に付き合うわけに行かない。

今夜は別の友達と予定がある。

ここ、渋谷で。

D Jの追っかけをしている友達とクラブに行く予定だ。

大丈夫だよ、とミナミは言う。

「ここは渋谷だよ。帰ろうと思えばすぐ帰れるよ。なんならあっちの渋谷から直接クラブに行けば良くない？」

確かにそうだなあと私は思う。

どちらにせよ、待ち合わせには間に合う。

こっちは渋谷だし、あっちも渋谷だ。

まあいいか。付きそいがてら遊ぶかな。

少し面倒くさいながらも、ミナミに手を引かれるがまま、黒い穴へと足を踏み入れる。

……結局のところ、今日は何曜日だったけ？

ドキドキではなく、うずうずする。



Iri

いり

de

Coming soon

guchi

ぐち